

エズラ記7-10章 「律法による改革」

1A 神の御手が置かれた帰還 7-8

1B 王による命令 7

1C 律法に通じた学者 1-10

2C 金銭的支援 11-24

3C 律法の執行 25-28

2B 旅の安全 8

1C 旅団と奉仕者の招集 1-20

2C 金銀の守り 21-34

3C 全焼のいけにえ 35-36

2A 異邦人との雑婚 9-10

1B 罪を犯した衝撃 9

1C つかさたちによる報告 1-4

2C 言葉も出ない告白 5-15

2B 罪の切り取り 10

1C 妻子供の追放 1-8

2C 該当者の調査 9-44

本文

エズラ記7章からです。私たちは、1章から6章まで総督ゼルバベルと、大祭司ヨシュアが率いるエルサレムへの帰還を読みました。これは第一次帰還でした。7章からは、律法学者エズラによる第二次帰還です。

1A 神の御手が置かれた帰還 7-8

1B 王による命令 7

1C 律法に通じた学者 1-10

7:1 これらの出来事後、ペルシヤの王アルタシャスタの治世に、エズラという人がいた。このエズラはセラヤの子、順次さかのぼって、アザルヤの子、ヒルキヤの子、7:2 シャルムの子、ツアドクの子、アヒトブの子、7:3 アマルヤの子、アザルヤの子、メラヨテの子、7:4 ゼラヘヤの子、ウジの子、ブキの子、7:5 アビシュアの子、ピネハスの子、エルアザルの子、このエルアザルは祭司のかしらアロンの子である。

「これらの出来事後」とありますが、ゼルバベルとヨシュアによる神殿の再建が完成したその後、ということでもあります。そして時は、「ペルシヤの王アルタシャスタの治世」です。6章では、ダリヨスが王でした。ダリヨスの治世第六年に神殿が完成されました。紀元前515年あるいは516年です。

そして、ダリヨスの息子クセルクセスが王になりました。クセルクセスは、エステル記のアハシュエロスです。ですから、エステル記はエズラ記の 6 章と 7 章の間に起こった出来事です。そして、アハシュエロスの死後、その息子アルタシャスタが王となっています。私たちは既に、アルタシャスタの治世において城壁再建の工事が阻止されたことを 4 章で読んだので、既出の人です。彼が統治を始めたのが、464 年です。エズラがエルサレムへ帰還するのが第七年と 7 節にありますから、紀元前 458 年に第二次帰還を行いました。6 章と 7 章の間は 57 年間になります。神殿が再建されてから、多くの月日が流れました。

そして、エズラの紹介があります。彼はアロンの直系であり、祭司です。「セラヤの子」とありますが、セラヤはバビロン捕囚の時の大祭司であります(2列王 25:18)。実はセラヤとエズラの間、二人の人がいることが歴代誌第一をみると分かります(6:7-10)。マタイによる福音書 1 章のイエス・キリストの系図もそうですが、系図は全ての人を書き記すのではなく、目的をもって書いています。ここではバビロン捕囚の時の大祭司の直系が、今、帰還しているのだという位置づけです。つまり、大祭司も主に対して罪を犯して捕囚の身となったが、同じ大祭司の子が主に立ち返って帰還するのだ、という位置づけでしょう。

ですから、ある意味で、一人の人が罪を犯し奉仕ができなかったが、罪から立ち返り回復した、というような見方ができるかもしれません。回復するというのは、素晴らしいことです。一人のクリスチャンが罪を犯して教会から離れてしまったけれども、また立ち直って帰ってきた。一人の牧者が罪を犯した、それで説教の奉仕から降りた。けれども、立ち直って再び牧会している。素晴らしい主の恵みです。

7:6 エズラはバビロンから上って来た者であるが、イスラエルの神、主が賜ったモーセの律法に通じている学者であった。彼の神、主の御手が彼の上にあったので、王は彼の願いをみなかなえた。7:7 アルタシャスタ王の第七年にも、イスラエル人のある者たち、および、祭司、レビ人、歌うたい、門衛、宮に仕えるしもべたちのある者たちが、エルサレムに上って来た。7:8 エズラは王の第七年の第五の月にエルサレムに着いた。7:9 すなわち、彼は第一の月の一日にバビロンを出発して、第五の月の一日にエルサレムに着いた。彼の神の恵みの御手が確かに彼の上にあった。7:10 エズラは、主の律法を調べ、これを実行し、イスラエルでおきてと定めを教えようとして、心を定めていたからである。

エズラは、祭司でありながら律法に精通する学者でした。祭司の務めは、聖所に入って香をたくことなどの他に、律法を教えるというものがありました。イスラエルに王が立てられた時は、祭司しからみ教えを書き写して、それを一生の間読まなければいけないという掟を、モーセは語りました(申命 17:18-19)。ですから祭司は律法を教える教師でもなければいけなかったのです。そして、特にバビロン捕囚以後は、神殿が破壊されてしまったため、彼らの拠り所は唯一、律法になりました。神殿のある時も、例えばヨシャパテ王はレビ人を各地に派遣して、律法を読ませ、説き明かし

をさせたのですが、神殿礼拝ができない今は、律法の朗読を中心に礼拝していったのです。これが、シナゴグ礼拝の始まりであり、新約時代、そして今の時代にまで続くユダヤ教の会堂の始まりです。

エズラは、10 節を見ますと、「主の律法を調べ、これを実行し、イスラエルでおきてと定めを教えようとして、心を定めていた」と言っています。これが私たち聖書の学徒の模範ですね。聖書の言葉を調べます、あるいは学びます。そしてそれは知的な把握ではなく、むしろ実行するためのものであります。ヤコブは、「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。(1:22)」と言いました。そして、自分の徳を高めるだけでは不十分であり、それを他の人々に教えていくのです。パウロがテモテに、「多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。(2テモテ 2:2)」と言いました。

そして、それに「心を定めていた」とあります。大事ですね、決意するのです、決断するのです。二心ではなく、心を定めたらもう後ろを振り返らないのです。その決意には、ここでエズラが言っているように、必ず主の御手があります。神が導き、私たちを運んでいってくださいます。

2C 金銭的支援 11-24

7:11 アルタシャスタ王が、祭司であり、学者であるエズラに与えた手紙の写しは次のとおりである。…エズラは、主の命令のことばと、イスラエルに関する主のおきてに精通した学者であった。…7:12 「王の王アルタシャスタ。天の神の律法の学者である祭司エズラへ。この件は完了した。さて、7:13 私は命令を下す。私の国にいるイスラエルの民、その祭司、レビ人のうち、だれでも自分から進んでエルサレムに上って行きたい者は、あなたといっしょに行ってよい。7:14 なぜなら、あなたは、あなたの手にあるあなたの神の律法に従ってユダとエルサレムを調査するよう、王とその七人の議官によって遣わされており、7:15 また、王とその議官たちが、エルサレムに住まれるイスラエルの神に進んでささげた銀と金、7:16 バビロンのすべての州で、あなたが得るすべての銀と金、それに、エルサレムにある自分たちの神の宮のために、民と祭司たちが進んでささげたささげ物をも合わせて携えて行くために遣わされているからである。

エズラが王に願いが聞き入れられた、そこには神の御手があったと言っていたのは、王がなんとなく、帰還させてあげてもよいだろうというものではありませんでした。エズラは、イスラエルの神について、その律法と神殿について、事細かに王に説明して、王にイスラエルの神の証しをしていたのです。そして神が王の心を動かし、王は異教徒であるにも関わらず、このような命令の文書を書いています。具体的には、バビロン州やその他の州に住むイスラエル人は自由に帰還してよいこと。それから、神の律法にしたがって今のユダとエルサレムがどのようになっているのかを調査すること。それから、神殿礼拝のために必要な金銀を、王とその議官たちから渡されたもの、また帰還をしないイスラエル人から与えられたもの、また帰還する彼ら自身から捧げられた物を携えていくことでした。いわば、この旅は、神の働きのための支援金を携えるための旅でした。

7:17 それゆえ、あなたはその献金で、牛、雄羊、子羊、また、そのための穀物のささげ物と注ぎのぶどう酒を心して買い求め、エルサレムにあるあなたがたの神の宮の祭壇の上で、それをささげなければならない。7:18 また、残りの銀と金の使い方については、あなたとあなたの兄弟たちがよいと思うことは何でも、あなたがたの神のみ心に従って行なうがよい。7:19 また、あなたの神の宮での礼拝のために、あなたに与えられた器具は、エルサレムの神の前に供えよ。7:20 その他、あなたの神の宮のために必要なもので、どうしても調達しなければならないものは、王の宝物倉からそれを調達してよい。

その金銀の使用する目的も定めています。それから不足分は王の宝物倉、つまりユダヤ人の住む地域を管轄するペルシヤの国庫があるのですが、そこから調達してよいとのこと。

7:21 私、アルタシャスタ王は、川向こうの宝庫係全員に命令を下す。天の神の律法の学者である祭司エズラが、あなたがたに求めることは何でも、心してそれを行なえ。7:22 すなわち、銀は百タラントまで、小麦は百コルまで、ぶどう酒は百バテまで、油も百バテまで、塩は制限なし。7:23 天の神の宮のために、天の神によって命じられていることは何でも、熱心に行なえ。御怒りが王とその子たちの国に下るといけなから。7:24 また、次のことを知らせる。祭司、レビ人、歌うたい、門衛、宮に仕えるしもべたち、つまり、この神の宮に仕える者にはだれにも、みつぎ、関税、税金を課してはならない。

ここは、具体的に「川向こう」すなわち、シリア・パレスチナ地方の宝庫係に直接命令しているところ。彼らがバビロン地方から携える金銀の他に、出さなければいけないものを指示しています。また、税金を祭司やレビ人に課してはいけません。

そしてアルタシャスタは、「天の神」とイスラエルの神のことを言い続けていますが、これが捕囚期、捕囚後に好まれていた神の呼び名です。バビロンの王に仕えていたダニエルの書き記したのものにも、「天の神」が出てきます(2:44)。それは、異教徒の神々が地上の神であり、そうではない超越した神だ、ということです。ネブカデネザルが夢を見て、呪術師など知者たちにその解き明かしただけでなく、夢そのものを言い当てると命令した時に、それはできないと彼らは言いました。そしてこう言いました。「王のお尋ねになることは、むずかしいことです。肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それを王の前に示すことのできる者はいません。(2:11)」そうです、私たちの神は、肉なる者とその住まいを共にしている神々ではありません。超越している方です。したがって、私たちの目で見るといろいろな物事を見て、心を騒がせたり、それに執着してはいけないということです。それをすべて、ご自分のみこころのままに動かしておられる、それら変わるものから離れている神にお仕えしているのだということを忘れてはなりません。

そして、アルタシャスタは興味深いことに、これらのことを何でも行え、なぜなら「御怒りが王とその子たちの国に下るといけなから」と言っています。アブラハムに対して主は、「あなたを祝福す

る者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。(創世 12:3)」と言われました。エズラはおそらく、出エジプトの歴史も王に話したのでしょう。イスラエルを呪うとどのような呪いが来るのか、神への恐れがアルタシャスタにあったのだと思われます。

3C 律法の執行 25-28

7:25 エズラよ。あなたは、あなたの手にあるあなたの神の知恵にしたがってさばきつかさや裁判官を任命し、川向こうにいるすべての民、すなわち、あなたの神の律法を知っているすべての者をさばかせよ。また、これを知らない者に、あなたがたは教えよ。7:26 あなたの神の律法と、王の律法を守らない者には、だれにでも、死刑でも、追放でも、財産の没収でも、または投獄でも、その判決を厳格に執行せよ。」7:27 私たちの父祖の神、主はほむべきかな。主はエルサレムにある主の宮に栄光を与えるために、このようなことを王の心に起こさせ、7:28 王と、その議官と、すべての王の有力な首長の好意を私に得させてくださった。私の神、主の御手が私の上にあったので、私は奮い立って、私といっしょに上るイスラエル人のかしらたちを集めることができた。

エズラは、律法を教えるだけでなく、王の出した法律も含めて、律法を厳格に執行する権限を、王に託されました。そこで9章以降に出てくる、異教徒の雑婚においてエズラは強い権限をもって妻子供を引き離すという決断を下しています。おそらくエズラには、律法を自由に教えることのできる喜びがあったのと同時に、祭司であり、律法学者にしかならないのにここまでの権限が与えられたのですから、恐れがあったでしょう。イスラエルのかしらたちをしっかりと治めなければいけません、それができるのか？午前にお話ししましたように、神の御手があったので彼らを集めることができました。

2B 旅の安全 8

1C 旅団と奉仕者の招集 1-20

8:1 アルタシャスタ王の治世に、バビロンから私といっしょに上って来た一族のかしらとその系図の記載は次のとおりである。

エズラの帰還旅団の系図が2節から14節までに書いてあります。ゼルバベルとヨシュアが帰還する時にも系図がありましたが、先ほど話しましたように罪を犯したイスラエルが、また新たに回復したことを示す意義を持っていると思われます。

そこに人数が記されていますが合計すると、1772名です。そして、後でレビ人が220名加えられます。ですから、だいたい二千人であり、それに妻子供を加えるとおそらく五千人ぐらいの人々だったでしょう。ゼルバベルの時は五万人ぐらいで、それでも非常に少ない人数でしたが、さらに少ないです。しかし、主の働きはいつも少ないです。ですからイエス様は、「収穫のために、働き人を遣わしてください。収穫の主は祈りなさい。」と命じられました。

それでは 15 節から読みます。8:15 私はアハワに流れる川のほとりに彼らを集め、私たちはそこに三日間、宿営した。私はそこに、民と祭司たちとを認めたが、レビ人をひとりも見つけることができなかった。8:16 それで、私はかしらのエリエゼル、アリエル、シェマヤ、エルナタン、ヤリブ、エルナタン、ナタン、ゼカリヤ、メシュラムと、教師エホヤリブ、エルナタンを呼び集め、8:17 彼らをカシフヤ地方のかしらイドのもとに遣わした。私は彼らにことばを授けて、私たちの神の宮に仕える者たちを連れて来るように、カシフヤ地方にいるイドとその兄弟の宮に仕えるしもべたちに命じた。

アハワという川がどこにあるかは分かりません。ユーフラテス川の分流の一つでしょう。そこに宿営していたら、なんとレビ人が独りもいません。私たちは歴代誌で、レビ人がいかに大切な務めを担っているかを学びました。歌うたい、門衛はみなレビ人が行いました。そこで、彼はレビ人を集めるように、他の地方に住んでいるレビ系の人々のところに人を送ります。しっかりとした霊的指針を伝えて、そこにここに書かれている人々を遣わしました。

8:18 私たちの神の恵みの御手が私たちの上にあったので、彼らはイスラエルの子、レビの子、マフリの子孫のうちから思慮深い人、シェレベヤと、その子たち、およびその兄弟たち十八名を私たちのところに連れて来た。8:19 また、ハシャブヤとともに、メラリの子孫のうちからエシャヤと、その兄弟と、その子たち二十名、8:20 および、ダビデとつかさたちにより、レビ人に奉仕するよう任命されていた宮に仕えるしもべたちのうちから、二百二十名の宮に仕えるしもべたちを連れて来た。これらの者はみな、指名された者であった。

神の恵みの御手、あるいは神の良き御手が彼らの上に置かれていました。それで「思慮深い人」が連れて来られました。この思慮深さは、あらゆる意味での思慮深さです。霊的に成熟した人、神の恵みに満ちた人、慎ましさを持っていると同時に、力と確信のある人です。

2C 金銀の守り 21-34

8:21 そこで、私はその所、アハワ川のほとりで断食を布告した。それは、私たちの神の前でへりくだり、私たちのために、私たちの子どもたちと、私たちのすべての持ち物のために、道中の無事を神に願い求めるためであった。8:22 私は道中の敵から私たちを助ける部隊と騎兵たちを王に求めるのを恥じたからである。私たちは、かつて王に、「私たちの神の御手は、神を尋ね求めるすべての者の上に幸いを下し、その力と怒りとは、神を捨てるすべての者の上に下る。」と言っていたからである。8:23 だから、私たちはこのことのために断食して、私たちの神に願い求めた。すると神は私たちの願いを聞き入れてくださった。

私たちは時に、大胆に信仰を証した後で、その後、本当に信じていたかを試される時があります。それがここです。今、見てきましたように、エズラはかなり詳細にイスラエルの神を王に話していました。それで、護衛を頼まずに、代わりに断食をして主に祈ったのです。

同じような挑戦を受けた神の人で、モーセがいます。彼がパロのところで、イスラエルの民を行かせなさい、さもなければかえるが水から出てきて、あなたの宮殿に入ると言いました。するとカエルだらけになりました。パロが、取り除くようにしてくれ、と頼みます。「これをナイルだけに残したらいいように、いつがよいか、言いつけてください。」と言いました。パロが、「あす」と言いました。そして、モーセは、「私たちの神、主のような方がほかにいないということ、あなたが知るためです。(出エジプト 8:10)」と言っています。けれども面白いのは、「モーセは、自分がパロに約束したかえるのことについて、主に叫んだ。(12 節)」とあることです。確かに信仰をもって、パロの前で宣言したのですが、ふと考えてみると、こんなこと本当にできるのか？と焦ったのです。それで、真剣に祈って、「主よー！」と叫んだのです。

預言者エレミヤも同じで、彼はおじの土地を買い戻しました。間もなくバビロンにユダは滅ぼされるのに、その直前に土地を購入したのです。けれども、ユダヤ人たちがここに戻ってくるのを信じて、「まことに、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。再びこの国で、家や、畑や、ぶどう畑が買われるようになるのだ。(32:15)」と宣言しました。こんなに確信に満ちています、主が語られて、それを信じていたからです。けれども、ふと考えると、とんでもない愚かなことをしてしまいました。それでその直後に祈るのです。「神、主よ。あなたはこの町がカルデヤ人の手に渡されようとしているのに、私に、『銀を払ってあの畑を買い、証人を立てよ。』と仰せられます。(25 節)」

そしてペテロもいますね。イエス様がガリラヤ湖の上を歩かれているのを見て、「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。(マタイ 14:28)」と言って、イエス様が「来い」と命じられて、彼は従いました。けれども、風によって波が立っているのを見て、恐くなって、沈みかけたのです。

モーセも、エレミヤも、ペテロも、そしてここではエズラも、すばらしい信仰の宣言をしています。後で焦って構いません。信仰を口で言い表すところに力があります。もちろん、その告白は自分で考えたものではなく、しっかりと神の言葉に基づいているものでなければいけません。そして、その告白にそって動くときに主がその通りにして下さるのです。

8:24 私は祭司長たちのうちから十二人、すなわち、シェレベヤとハシャブヤ、および彼らの同僚十人を選び出し、8:25 王や、議官たち、つかさたち、および、そこにいたすべてのイスラエル人がささげた、私たちの神の宮への奉納物の銀、金、器類を量って彼らに渡した。8:26 私は銀六百五十タラント、また、百タラント相当の銀の器類、および、金百タラントを量って彼らに渡した。8:27 それにまた、一千ダリク相当の金の鉢二十。また、金のように高価な、光り輝くみごとな青銅の器類二個を彼らに渡した。

銀は約 2.2 トン、銀の器が 340 キロ、金も 340 キロぐらい、そして 8.5 キロの金の鉢です。それ以外に青銅の器があります。

8:28 ついで、私は彼らに言った。「あなたがたは主の聖なるものである。この器類も聖なるものとされている。この銀と金は、あなたがたの父祖の神、主への進んでささげるささげ物である。8:29 あなたがたは、エルサレムの主の宮の部屋で、祭司長たち、レビ人たち、イスラエルの一族の長たちの前で量るまで、寝ずの番をして守りなさい。」

これらの金銀も貴重なものですが、大事なのは彼ら自身も聖なるものである、聖別されているということです。聖別を受けた彼らが、これまで聖別されている器類を守ります。いつ盗賊が来るか分かりませんから、寝ずの番をします。

8:30 祭司とレビ人たちは、その銀、金、器類を、エルサレムの私たちの神の宮に持って行くために、量って、受け取った。8:31 私たちはエルサレムに行こうと、第一の月の十二日にアハワ川を出発した。私たちの神の御手が私たちの上であって、その道中、敵の手、待ち伏せする者の手から、私たちを救い出してくださった。8:32 こうして、私たちはエルサレムに着いて、そこに三日間とどまった。

到着して三日間、休憩を取りました。

8:33 四日目に銀と金と器類が、私たちの神の宮の中で量られ、ウリヤの子の祭司メレモテの手に渡された。彼とともにピネハスの子エルアザルがおり、彼らとともにレビ人であるヨシュアの子エホザバデと、ビヌイの子ノアデヤがいた。8:34 全部が数えられ、量られた。そのとき、全重量が書き留められた。

ここに出てくる祭司たちの名は、ネヘミヤ記にも出てきます。エズラもまた、ネヘミヤ記に出てきて、ネヘミヤと共に働き、エズラは民に律法を教えます。

3C 全焼のいけにえ 35-36

8:35 捕囚の人々で、捕囚から帰って来た者は、イスラエルの神に全焼のいけにえをささげた。すなわち、イスラエル全体のために雄牛十二頭、雄羊九十六頭、子羊七十七頭、罪のためのいけにえとして雄やぎ十二頭をささげた。これはすべて主への全焼のいけにえであった。8:36 それから、彼らは王の命令書を、王の太守たちと、川向こうの総督たちに渡した。この人たちは、この民と神の宮とに援助を与えた。

帰還したので、主に全焼のいけにえを捧げました。イスラエル全体のために十二頭捧げているので、イスラエル十二部族を表しています。ユダとベニヤミン以外の部族も含まれています。そして、アルタシャスタの命令書をその総督たちに渡しました。

2A 異邦人との雑婚 9-10

さてこれから、いよいよエズラがイスラエルの民に律法をもって建て上げていくこととなります。ところが、その前に想像もできなかった驚愕の事実をエズラは知らされます。

1B 罪を犯した衝撃 9

1C つかさたちによる報告 1-4

9:1 これらのことが終わって後、つかさたちが私のところに近づいて来て次のように言った。「イスラエルの民や、祭司や、レビ人は、カナン人、ヘテ人、ペリジ人、エブス人、アモン人、モアブ人、エジプト人、エモリ人などの、忌みきらうべき国々の民と縁を絶つことなく、9:2 かえって、彼らも、その息子たちも、これらの国々の娘をめとり、聖なる種族がこれらの国々の民と混じり合ってしまった。しかも、つかさたち、代表者たちがこの不信の罪の張本人なのです。」

今、起こっている状況は、おそらく神のことばを恐れるイスラエルのかしらたちが、自らエズラのところに行って、この問題を伝えたのだらうと思われます。彼らは、ゼルバベルが帰還した第一次帰還民、あるいはその子弟です。バビロン捕囚になったのは、モーセの律法に背いたからだという痛切な悔い改めに基づき、律法の遵守が前提で帰還の生活を送っていたはずでした。ところが、この異邦人との結婚が起こってきています。しかも、祭司やレビ人の中、つかさたちの中にもいるということです。それらは悪いことだということは分かっていたけれども、戒めることも取り除くこともできていませんでした。律法を遵守させるために来たエズラの存在によって、ただその存在だけで、自分たちの良心が痛み始めたのだと思います。そこでエズラは、一言も声を出していないのに自分たちから話し始めたのです。

覚えていますか、主が約束の地にイスラエル人たちを連れて行かれる時に、モーセが語りました。「あなたが、はいつて行って、所有しようとしている地に、あなたの神、主が、あなたを導き入れられるとき、主は、多くの異邦の民、すなわちヘテ人、ギルガシ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およびエブス人の、これらあなたよりも数多く、また強い七つの異邦の民を、あなたの前から追い払われる。あなたの神、主は、彼らをあなたに渡し、あなたがこれを打つとき、あなたは彼らを聖絶しなければならない。彼らと何の契約も結んではならない。容赦してはならない。また、彼らと互いに縁を結んではならない。あなたの娘を彼の息子に与えてはならない。彼の娘をあなたの息子にめとってはならない。彼はあなたの息子を私から引き離すであろう。彼らがほかの神々に仕えるなら、主の怒りがあなたがたに向かって燃え上がり、主はあなたをたちどころに根絶やしにされてしまわれる。(申命記 7:1-4)」

これは、異邦人との結婚そのものが悪いということではありません。覚えていますか、エリコにいたカナン人ラハブは、イスラエル人の間に住み、その子孫がダビデであり、そして最後はイエス・キリストに至るのです。また、モアブ人ルツもボアズと結婚しました。けれども彼女たちは、イスラエルの神に仕えて、従うという改宗を行っていました。ここで禁じている異邦人との結婚は、イス

ラエルの神に仕えずに、そのまま自分たちの神々に仕えている女たちと交わることです。

「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。(2コリント 6:14)」とパウロは言いました。前後関係では、これはもちろん結婚関係のことだけを話しているわけではありません。けれども、いろいろな交わりの中で結婚は最も深い交わりの一つです。結婚は、キリストと教会を表しており、霊において主と私たちが一つになることを、男と女も結婚によって表します。主イエスに従うことを決めていない人と結婚するならば、結婚をしていることの意味を損なうことになるでしょう。

そして、不信者との結婚についてはコリント第一 7 章の中でパウロは話しています。自分が信じていない時に結婚をして、自分だけがイエス様を信じていることがあります。あるいは、自分が信仰的に後退してしまっていて、それで未信者の人と結婚してしまった人たちもいます。その時に、離婚をすべきなのでしょう？ 後で、10 章でエズラとイスラエルの民が異邦人の女たちと離縁させるという、非常に辛い決断を取っていますが、このことについては後で説明します。今の、新約時代の教会においては、パウロの助言に従うべきです。「なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。(14 節)」

不信者と結ばれている時に、自分自身が信仰を持っているゆえに、その結婚また子息を聖いと神は宣言してくださいます。つまり、離婚しなくてよいということです。けれども、夫あるいは妻が、自分の信仰によって離縁することを決めるならば、その時には自分がクリスチャンだから彼あるいは彼女を救わなければいけないのだ、と思わなくてよい、出ていかせるままにしないで、と言っています。

9:3 私はこのことを聞いて、着物と上着を裂き、髪の毛とひげを引き抜き、色を失ってすわってしまった。9:4 捕囚から帰って来た人々の不信の罪のことで、イスラエルの神のこばを恐れている者はみな、私のところに集まって来た。私は夕方のささげ物の時刻まで、色を失ってじっとすわっていた。

ユダヤ人が嘆き悲しむ時に、着物と上着を裂きます。そして怒りが極まった時には、髪の毛と髭を引き抜きます。そしてあまりにもの衝撃で、祈り始めるまでしばらく時間がかかっています。色を失っています。罪への悲しみ、そして神の裁きが下るのではないかという恐れも混ざっていたことでしょう。そして、イスラエルの民の中でも神のみこばを恐れる人々が、自然に集まってきました。

2C 言葉も出ない告白 5-15

9:5 夕方ささげ物の時刻になって、私は気を取り戻し、着物と上着を裂いたまま、ひざまずき、私の神、主に向かって手を差し伸ばし、祈って、9:6a 言った。

夕方のささげ物の時刻は、だいたい三時頃です。ささげ物の時刻は、祈るのにも最適な時だったのでしょう。そして、ひざまずいています。聖書には数多くのところで、ひざまずいている姿を見ることができます。最も有名なのは、イエス様がゲッセマネの園で祈られた時です(ルカ 22:41)。ひざまずかなければいけないということではありませんが、とても良い姿勢です。

さらに、主に手を差し伸ばして祈っています。これが聖書では、しばしば出てくる祈りです。主に明け渡し、心を開き、主が語られることは何で受け入れるという姿勢です。ひざまずくのも合わせて、ちょうど乞食が物乞いをする時の姿勢に近いです。現代は、目をつむり、頭を垂れて祈るというものですが、それは聖書には出てきません。目をつむるのは私も集中できるので行いますが、目をあけて祈る人も多くいます。

9:6b 「私の神よ。私は恥を受け、私の神であるあなたに向かって顔を上げるのも恥ずかしく思います。私たちの咎は私たちの頭より高く増し加わり、私たちの罪過は大きく天にまで達したからです。

イエス様のたとえで、パリサイ人と取税人が神殿で祈る時に、取税人は天に目も向けず、胸をたたいて祈りました(ルカ 18:13)。同じように、面目がないということで顔を神に向けることが恥ずかしくなっています。そして咎や罪過が、洪水の水かさのように頭を越えて、はるか天にまで届いてしまった、と言っています。

9:7 私たちの先祖の時代から今日まで、私たちは大きな罪過の中にありました。私たちのその咎のため、私たちや、私たちの王、祭司たちは、よその国々の王たちの手に渡され、剣にかけられ、とりこにされ、かすめ奪われ、恥を見せられて、今日あるとおりです。9:8 しかし、今、しばらくの間、私たちの神、主のあわれみによって、私たちに、のがれた者を残しておき、私たちのためにご自分の聖なる所の中に一つの釘を与えてくださいました。これは、私たちの神が私たちの目を明るくし、奴隷の身の私たちをしばらく生き返らせてくださるためでした。9:9 事実、私たちは奴隷です。しかし、私たちの神は、この奴隷の身の私たちを見捨てることなく、かえって、ペルシヤの王たちによって、私たちに恵みを施し、私たちを生かして、私たちの神の宮を再建させ、その廃墟を建て直させ、ユダとエルサレムに石垣を下さいました。

主が憐れみをかけてくださったことを述べています。自分たちの罪過のためバビロンに捕え移されたけれども、今は逃れた者を残して下さり、さらに聖所まで与えてくださいました。「一つの釘」というのは、器などをかけておくために壁に打つ釘のことです。今は、皿などを置く戸棚がありますが、当時は壁に釘を刺してそこに掛けていました。そこで、奴隷の身でありながら、彼らに希望の一筋の光を見せてくださったのです。それで彼らは生き返りました。ペルシヤ王に憐れみの心を与えて下さり、それで宮を再建し、廃墟を建て直させてくださいました。

9:10 今、こうなってからは、何と申し上げたらよいのでしょうか。私たちの神よ。私たちはあなたの命令を捨てたからです。

「何と申し上げたらよいのでしょうか」・・・もう言い訳はできない、ということです。異邦人との結婚によって偶像礼拝に陥り、そしてバビロンに捕え移したのに、帰還したらまた同じ罪に戻ってしまったということです。

エズラの衝撃は、使徒ペテロが語った、救われる前の罪の中に戻ることに繋がります。「主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪いものとなります。義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったです。彼らに起こったことは、「犬は自分の吐いた物に戻る。」とか、「豚は身を洗って、またどろの中に入っていく。」とかいう、ことわざどおりです。(2ペテロ 2:20-22) 私たちは、この言葉を聞いて、救われる前の罪に戻ったら救いを失ってしまうのか？と誤ってしまいます。けれども、そこまでは書いてありません。しかし、義の道を知っていながら聖なる命令に背くことが、どれほど惨めなことか、痛ましいことか、愚かであるかを教えています。つまり、世にいる人が罪を犯して悲惨な思いをするよりも、クリスチャンが同じ罪を犯してもっと悲惨な思いをするということです。

そして、「何と申し上げたらよいのでしょうか」と言った後に、「命令を捨てたからです」と言っています。私たちは罪を犯した時に、多くの言葉をいいたがります。いろいろな言い訳をしたい、正当化したいという思いが働くからです。サウルが、罪を犯した時に、主に全焼のいけにえを捧げるために、聖絶しないで残しておいたのだ、と言いましたが、それは言い訳でした。ダビデはウリヤを殺したその罪を、「私は主に対して罪を犯した。(2サムエル 12:13)」とだけ言いました。これが真実な罪の告白です。自分の罪を認めたのです。

9:11 あなたは、あなたのしもべ、預言者たちによって、こう命じておられました。『あなたがたが、はいて行って所有しようとしている地は、その国々の民の、忌みきらうべき行ないによって汚された汚らしい地であり、その隅々まで、彼らの汚れで満たされている。9:12 だから、今、あなたがたの娘を彼らの息子にとつがせてはならない。また、彼らの娘をあなたがたの息子にめとってはならない。永久に彼らの平安も、しあわせも求めてはならない。そうすれば、あなたがたは強くなり、その地の良い物を食べ、これを永久にあなたがたの子孫のために所有することができる。』と。

11 節はレビ記 18 章から来ている言葉で、12 節は出エジプト記 34 章から来ている言葉です。エズラは、確かに律法に詳しい人でした。そして新約聖書の使徒たちも、また初代教会の信徒たちも聖書を数多く祈りの中でした。聖書に出てくる神の人たちは、同じように御言葉を祈りの中で多用しました。祈りに御言葉を使うことは、主の御心にかなった祈りになっていきます。

9:13 私たちの悪い行ないと、大きな罪過のために、これらすべてのことが私たちの上に起こって後、**事実**、私たちの神、あなたは、私たちの咎の受けるべき刑罰よりも軽く罰し、このようにのがれた者を私たちに残してくださいました。**9:14** 私たちは再び、あなたの命令を破って、忌みきらうべき行ないをするこれらの民と互いに縁を結んでよいのでしょうか。あなたは私たちを怒り、ついには私たちを絶ち滅ぼし、生き残った者も、のがれた者もないようにされるのではないのでしょうか。

13 節にある、「受けるべき刑罰よりも軽く罰し」というのは、エズラが神の裁きを正しく理解していたことを表しています。本来ならば、絶滅して全くおかしくなかったのです。それなのに、逃れた者たちを残すために、受けるべき刑罰よりも軽かったのです。なのに、その生き残った者たちがこれらの民と縁を結んだのですから、神の怒りから逃れようがないということです。

9:15 イスラエルの神、主。あなたは正しい方です。まことに、今日あるように、私たちは、のがれた者として残されています。ご覧ください。私たちは罪過の中であなたの御前におります。このような状態で、だれもあなたの御前に立つことはできないのに。」

ダニエルが、ユダヤ人のために祈った時も、「あなたは正しい方です」という告白をしました。自分たちの身に起こったことをすべて甘んじて受けたのです。決して、自分の不幸を神のせいにしませんでした。

そしてエズラは、これ以上何をしてほしいという願いを立てていません。ただ、主の前にいることしかできませんでした。いや、主の前にいることさえできません。そしてこの告白が、使徒パウロがローマ書で宣言したことです。「それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。(3:19)」私たちは、エズラのようになれないか、あるいはなると絶望します。エズラのようになれないというのは、まだ自分に言い訳ができると思ってしまうことです。そして、絶望するというのは、自分に救いは残されていないと絶望することです。しかし、使徒パウロはその言葉を伝えた後に、私たちは律法の行いによって義と認められるのではなく、ただ信仰によって義と認められる、と宣言しました。

ここからが、神の恵みが働くときです。キリストの十字架は、言い訳のできない罪を犯した時、ただ神の前に立つ、いや立つことさえもできない時、私たちのものとなります。宗教改革者ルターは、この絶望の底にいる罪人を、神がもっぱら赦してくださいることを、詩篇 130 篇を使って賛美しました。「主よ。深い淵から、私はあなたを呼び求めます。主よ。私の声を聞いてください。私の願いの声に耳を傾けてください。主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。しかし、あなたが赦してくださいるからこそあなたは人に恐れられます。(1-4 節)」

2B 罪の切り取り 10

1C 妻子供の追放 1-8

10:1 エズラが神の宮の前でひれ伏し、涙ながらに祈って告白しているとき、イスラエルのうちから男や女や子どもの大集団が彼のところに集まって来て、民は激しく涙を流して泣いた。

主の御手が置かれていたエズラであります、彼が祈っていると、自発的にどんどん人が集まってきました。彼がいるだけで主への恐れが広がり、このように大集団となって集まっています。これから、神の大いなる裁きが下るということも踏まえて激しく泣いているのでしょう。

10:2 そのとき、エラムの子孫のひとりエヒエルの子シェカヌヤが、エズラに答えて言った。「私たちは、私たちの神に対して不信の罪を犯し、この地の民である外国の女をめぐりました。しかし、このことについては、イスラエルに、今なお望みがあります。10:3 今、私たちは、私たちの神に契約を結び、主の勧告と、私たちの神の命令を恐れる人々の勧告に従って、これらの妻たちと、その子どもたちをみな、追い出しましょう。律法に従ってこれを行ないましょう。10:4 立ち上がってください。このことはあなたの肩にかかっています。私たちはあなたに協力します。勇気を出して、実行してください。」

これは、あまりにも辛い処置です。強制的に離婚させます。そこには子供もいます。けれども、契約の民の存続のためには必要な緊急措置でした。その女たちがいれば、イスラエルの民が偶像礼拝に陥り、この民が滅びるのは必至だからです。

10:5 そこで、エズラは立ち上がり、祭司や、レビ人や、全イスラエルのつかさたちに、この提案を実行するように誓わせたので、彼らは誓った。10:6 エズラは神の宮の前を去って、エルヤシブの子ヨハナンの部屋に行き、パンも食わず、水も飲まずにそこで夜を過ごした。捕囚から帰って来た人々の不信の罪を嘆き悲しんでいたからである。10:7 そこで、彼らは、捕囚から帰って来た者はみなエルサレムに集合するようにと、ユダとエルサレムにおふれを出した。10:8 それには、つかさたちや長老たちの勧告に従って、三日のうちに出席しない者はだれでも、その全財産は聖絶され、その者は、捕囚から帰って来た人々の集団から切り離されることになっていた。

誓いを立てさせました。三日のうちに出席しなければ、全財産の聖絶、帰還の民からの断絶が課せられます。覚えていますか、エズラはペルシヤの王から、厳格に律法を執行する権限が与えられました。ですから神の権威でもあり、また国の権威としての力も持っていました。

2C 該当者の調査 9-44

10:9 それで、ユダとベニヤミンの男はみな、三日のうちに、エルサレムに集まって来た。それは第九の月の二十日であった。こうして、すべての民は神の宮の前の広場にすわり、このことと、大雨のために震えていた。10:10 祭司エズラは立ち上がって、彼らに言った。「あなたがたは、不信の

罪を犯した。外国の女をめぐって、イスラエルの罪過を増し加えた。10:11 だから今、あなたがたの父祖の神、主に告白して、その御旨にかなったことをしなさい。この地の民と、外国の女から離れなさい。」

第九の月は 11 月から 12 月にかけて、です。イスラエルでは十月の収穫が終わると、雨期に入ります。その雨が強く降っているところで、神の宮の前の広場に彼らを集めました。今の霊的状况の悲惨さを象徴しているかのようです。

10:12 全集団は大声をあげて答えて言った。「必ずあなたの言われたとおりにします。10:13 しかし、民は大ぜいであり、また、大雨の季節ですから、私たちは外に立っていることができません。しかも、これは一日や二日の仕事でもありません。このことでは、私たちの多くの者がそむいているのですから。10:14 私たちのつかさたちは全集団に代わって、ここにとどまっていたきたい。そして、私たちの町で外国の女をめぐった者がみな、定まった時に、それぞれの町の長老たちとさばきつかさたちといっしょに出て来るようにしていただきたい。そうすれば、このことについての私たちの神の燃える怒りは、私たちから遠ざかるでしょう。」

民からの提案はもつともです。雑婚している者たちは大勢いるので、各々の町の長老が責任をもって該当する者たちを連れてきます。長老が、もつともその地域の人々を知っているからです。

10:15 アサエルの子ヨナタンとティクワの子ヤフゼヤだけは、メシュラムとレビ人シャベタイの支持を得て、これに反対したが、10:16 捕囚から帰って来た人々は、その提案どおりにした。祭司エズラは、彼らの一族のために、一族のかしらのある者たちをみな、名ざして選び出した。こうして、彼らはこのことを調べるために、第十の月の一日に会議を始め、10:17 第一の月の一日までに、外国の女をめぐった男たちについて、みな調べ終えた。

興味深いですね、反対者がいます。メシュラムという名が、罪を犯していた者たちの名前の列挙に出てきます(29 節)。そして調査を開始させました。三か月かかっています。それだけ多くの者たちがいた、ということです。

10:18 祭司の子らのうちで、外国の女をめぐった者がわかったが、それはエホツアダクの子ヨシユアの子たちと、その兄弟たちのうちから、マアセヤ、エリエゼル、ヤリブ、ゲダルヤであった。10:19 彼らはその妻を出すという誓いをして、彼らの罪過のために、雄羊一頭を罪過のためのいけにえとしてささげた。10:20 イメル族のうちでは、ハナニとゼバデヤ。10:21 ハリム族のうちでは、マアセヤ、エリヤ、シェマヤ、エヒエル、ウジヤ。10:22 パシュフル族のうちでは、エルヨエナイ、マアセヤ、イシュマエル、ネタヌエル、エホザバデ、エルアサ。10:23 レビ人のうちでは、エホザバデ、シムイ、ケラヤ・すなわちケリタ・、ペタヘヤ、ユダ、エリエゼル。10:24 歌うたいのうちでは、エルヤシブ。門衛のうちでは、シャルム、テレム、ウリ。

祭司とレビ人の中で罪を犯した者たちが筆頭に書かれています。そして、彼らは律法にしたがって、罪過のいけにえを捧げています。罪過のいけにえとは、純粹に神に対して罪を犯した罪のいけにえと異なり、他者に損害をもたらした時に捧げるいけにえです。そして、25 節か 43 節までは、一般のイスラエル人でそれを行った者たちの名が記されています。ここを見ると、エズラ記 2 章に出てくる家の名前と多くが重なっています。44 節を読みます。

10:44 これらの者はみな、外国の女をめとった者である。彼らの妻たちのうちには、すでに子どもを産んだ者もいた。

とても厳しい処置であります、子供も出ていかなければいけません。思えば、アブラハムも同じ処置を取りました。ハガルとその子イシュマエルを追い出しました。約束の子、御霊による子が、肉による子孫と神のものを相続することはできないからです。

同じように、私たちは肉なるものを神の国まで持っていくことはできません。肉の行いをしているものは、神の国を相続できないとガラテヤ書 5 章にあります。イエス様の言葉を思い出します。「もし、右の目が、あなたをつまずかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。(マタイ 5:29)」これは、自分たちが救われるためには、時にからだの一部を切るほどの荒治療が必要になるということです。その時は辛いです。痛いです。呆然とするかもしれません。けれども主は、必ず私たちの霊を救ってくださいます。